

# 港湾振興便り



2017. 2

第117号

\*:\*~

## 目次

\*:\*:\*:\*:\*:\*:\*:\*:\*:\*:\*:\*:\*~

- 1 **ポートエッセイ** —地域の健康度を「見える化」して  
健康寿命の延伸を推進—  
～日本港湾振興団体連合会会長(新潟市長) 篠田 昭～
- 2 **トピック**
  - 国際バルク戦略港湾 釧路港で大型ジャケットの据付開始  
(北海道開発局 港湾空港部 港湾計画課)
  - 「ザ・シンポジウムみなと in 函館」を開催  
(「ザ・シンポジウムみなと」実行委員会)
  - 酒田港「ポート・オブ・ザ・イヤー2016」を受賞  
(酒田市商工観光部 商工港湾課)
  - 「酒田港ポートセミナー」を開催  
(酒田市商工観光部 商工港湾課)
  - 大阪港開港150年に、西日本最長の大水深コンテナターミナルが供用開始！  
(近畿地方整備局 大阪港湾・空港整備事務所)
  - 志布志港みなと見学会の開催  
(九州地方整備局 志布志港湾事務所)
- 3 **お知らせ**
  - ◇第13回大阪湾フォーラム
  - ◇みなとオアシス三原
  - ◇広島みなとフェスタ みなとでつながる海と島と人

\*:

# 1 ポートエッセイ —地域の健康度を「見える化」して

## 健康寿命の延伸を推進—

～日本港湾振興団体連合会会長(新潟市長) 篠田 昭～

\*:

「1丁目1番地」政策にして市民にアピールするか、頭をひねっている首長が多いことだろう。私が市長を務める新潟市では「健康寿命の延伸」を掲げることにした。

「健康で長生き」—これはすべての地域の願いだろうが、新潟市はほかより切実度が高い。というのも新潟市民は他都市と比べて平均寿命が長いからだ。特に女性は全国平均を0.9歳上回る87.3歳で、政令市20市の中でも最も長寿となっている。喜ばしいことだ。一方、健康寿命の比較では全国平均を0.06年上回っているが、平均寿命を勘案すれば健康でなくなってから過ごす期間が全国よりも長くなってしまう。

これはご本人も大変だし、ご家族の負担も大きい。さらに有り体に言えば、自治体の負担も大きいということになる。さらに65歳以上の要介護度別人口の割合でも「要介護2」以上の割合が全国は9.6%なのに対し、新潟市は10.9%と高い。新潟市民の長寿を心から祝うには健康寿命の延伸が欠かせない。

(健康づくりに3割の壁)

では、どうすれば健康寿命の延伸を実現できるのか。これまで新潟市は、まちづくりと健康づくりを連動させるスマートウエルネスシティ(健幸都市づくり)のお仲間に入れてもらい、勉強を重ねてきた。この運動を牽引いただいている筑波大学の久野譜也先生らからさまざまなことを教えてもらったが、その一つが「3割の壁」だった。いくら健康情報をお届けしても、関心を持ってくれるのは3割程度で、あとの7割は「私はまだ大丈夫」「心配ない」と思い込んで健康づくりに関心を示していただけないのだという。これは大都市でも田園地帯でも同じ傾向だそうだ。

その無関心層に健康づくりに参加してもらうにはどうすればいいのか。久野さんは「3つのやり方がある」と言う。1つは健康ポイントなどで動機づけをすることだ。健康にいいことをやってポイントをためるとこんな物がもらえます—などとモノで釣るやり方だ。2つ目が「無関心のまま健康になってもらう」やり方で、スマートウエルネスが典型例だ。「歩いて楽しく、自転車や公共交通で便利に移動できるまち」をつくると、自然に一日の歩数が伸びて健康につながるやり方だ。そして3番目が「ロコミ」の活用だという。女性専門の健康教室「カーブス」では女性のロコミを活かして利用者を飛躍的に伸ばしてきた。

(健康度を中学校区単位で見える化)

1点目と2点目には新潟市も既に取り組んでいるので、新年度からは「ロコミ」の活用に着手したい。ロコミの担い手は女性というよりは地域力だ。現在、新潟市では国保と後期高齢者医療保険、協会けんぽの加入者の医療データを分析中だ。これによって81万市民のうち50万人分の健康データを把握できる。これを地域ごとに分析し、中学校区単位を基本に健康データを「見える化」し、今年度内にはコミュニティ協議会など地域のまとめ役に見てもらおうことにしている。

地域ごとに健康度が相当ばらついていることは把握済みなので、このデータはかなりの衝撃を、特に健康度の悪い地域に与えることになるだろう。「なぜ、うちの地域はこんなに健康度が低いのか」「健康度の高い地域はどんなことに取り組んでいるのか」—そんなことを地域のまとめ役に思いをめぐらしてもらえば、まずは成功の第一歩だ。次は「我がこと」として地域の健康度を捉え、自らの地域の健康度についてさまざまな機会にお話してもらおう。次の段階は行動だ。健康度の高い地域の取り組みに学び、食生活や運動習慣の改善、特定健診の受診率アップなど、それぞれの地域で健康度を高め合う取り組みをスタートしてもらおう。健康度の高い地域には「健康ポイント」を地域に差し上げ、それを原資として、一層の健康づくりに取り組んでもらうことも可能と思う。

全国各地で健康寿命の延伸を競い合うことも地方創生につながるのではないだろうか。



続いて、沖田一弘日本海事新聞社編集局取材部長をコーディネーターに、工藤市長や上田氏、井上敏廣函館朝市協同組合連合会理事長、折谷久美子NPO法人スプリングボードユニティ21理事長、高田悟JTB北海道函館支店長、笹島隆彦北海道開発局港湾空港部長がパネリストとなり、パネルディスカッションが行われました。

冒頭では、笹島部長から若松ふ頭でのクルーズ船対応岸壁整備に関し、「ダイヤモンド・プリンセス」が接岸したイメージ画像を用いて、市民の方々が普段利用しているJR函館駅周辺の景観や人気観光地「八幡坂」からの眺望を、整備前と整備後を比較しながら説明しました。

また、上田氏は「寄港地での滞在時間を有効活用するため、インターネット等による事前情報発信が重要」と強調し、岸壁で乗客に手づくりのイカ飯をふるまう活動を続けている折谷理事長は「乗客だけでなくクルーが楽しめる仕掛けも必要」と提案され、他には「新幹線とクルーズを組み合わせ商品開発に注力したい」「忙しい人にはご家族への特別なプレゼントとしての商品化」など、様々な意見が飛び交いました。最後は、工藤市長より「寄港回数を現在の倍となる年間70回を目標としてポートセールスに励みたい。市民向けの見学会やツアーなども企画したい」と、今後の意気込みについてお話いただきました。



＜函館遺愛女子高等学校の吹奏楽局による演奏＞



＜基調講演の様子＞



＜パネルディスカッションの様子＞

## ●酒田港「ポート・オブ・ザ・イヤー2016」を受賞

(酒田市商工観光部 商工港湾課)

全国の企業・団体で組織する公益社団法人日本港湾協会(会長 宗岡 正二 新日鉄住金株式会社 会長)が発行する情報誌「港湾」では、読者の投票を行い、港湾の物流、人流、産業、観光、みなとまちづくり等の各種の港湾活動、その他みなとに関する話題づくりにおいて、その年で最も優れ、日本の港湾・臨海部の活性化に寄与し、「みなとの元気」を高めた港湾を1年に全国で1港選定し、「ポート・オブ・ザ・イヤー」として顕彰しています。

選定は、投票数とともに投票者の選定理由によって決定され、酒田港が最も高い支持と評価を受け、「ポート・オブ・ザ・イヤー2016」に選定されました。

今回の選定では、官民一体となったポートセールス活動を展開し、外国船社によるクルーズ船の寄港が決定したこと、コンテナ取扱貨物量が飛躍的に増加したこと、市民や地元関係者が中心となった「酒田ビッグビーチフェスタ2016」「みなとオアシスマつり」「みなとカヤックツーリング」を開催するなど、市民にとっての賑わいを創出したことが高く評価されました。

今回の受賞は、市民の皆様はじめ、地元国会議員の先生方、港湾整備・振興にご尽力いただいている国土交通省、日々の港湾管理にご尽力いただいている山形県、そして地元経済界ならびに酒田港を利用いただいている

企業・荷主の皆様のご尽力の賜物であり、この度の受賞を弾みとして、これからも港町酒田の発展と賑わいづくりに取り組んでまいります。



<授賞式 左:宗岡会長 中央:丸山酒田市長>



<賞状と記念楯は市役所内に展示>



<「ポート・オブ・ザ・イヤー2016」賞状>



<「ポート・オブ・ザ・イヤー2016」記念楯>

●酒田港ポートセミナーを開催

(酒田市商工観光部 商工港湾課)

平成29年1月16日に山形県新庄市において、山形県が主催、酒田市が共催する「酒田港ポートセミナー」が開催されました。

「酒田港ポートセミナー」は、毎年開催され今年で18回目となりますが、新庄市が所在する最上地域では初めての開催となりました。

セミナーでは、山形県より酒田港の概要についてのプレゼンテーション、国土交通省酒田港湾事務所から「酒田港における取り組みについて」、同省山形河川国道事務所から酒田港と最上地域を結ぶ高規格道路「新庄酒田道路」に関して、「新庄酒田道路が秘める可能性」について、それぞれ情報提供が行われ、酒田港立地企業であるサミット酒田パワー株式会社、コンテナ貨物の利用企業である花楸産業株式会社、それから日本海側でクルーズ船の寄港において寄港数が増進している境港の関係者より境港での取り組みについて事例発表が行われました。

セミナー当日は、前日からの寒波による降雪が続き、除雪が間に合わない状況で、酒田市と新庄市を結ぶ国道47号線が大規模な交通障害を起こす事態となりました。出席した当市副市長の矢口から「新庄酒田道路の重要性を肌身で感じてやってまいりました」とのあいさつの際には会場から拍手が巻き起こりました。

セミナーには企業関係者ら160人が参加し、酒田港の活況な状況や、外国クルーズ船寄港への期待、新庄酒田道路の可能性について、熱心に耳を傾けていました。



<細谷 知行 山形県副知事>



<小谷野 喜二 国土交通省東北地方整備局副局長>



<上原 修二 国土交通省東北地方整備局酒田港事務所長>



<廣瀬 健二郎 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所長>

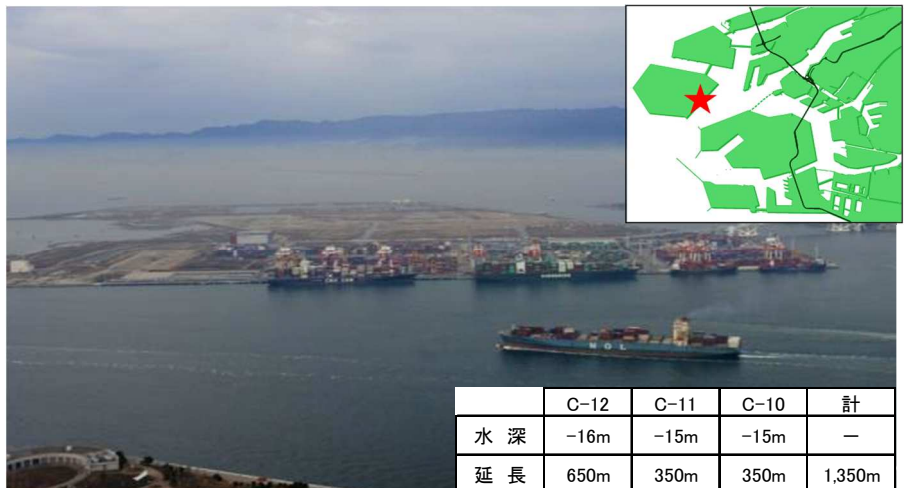
●大阪港開港150年に、西日本最長の大水深コンテナターミナルが供用開始！

(近畿地方整備局 大阪港湾・空港整備事務所)

近畿地方整備局大阪港湾・空港整備事務所では、国際コンテナ戦略港湾である大阪港夢洲地区におきまして、平成25年度から夢洲コンテナターミナルの岸壁部を250m延伸する工事を進めておりました。

この度1月末をもってその工事を終え、2月1日から既存施設と一体的に運営が開始されることとなりました。これにより全長1,350m水深15～16mの西日本最長のコンテナターミナルとなります。

また、大規模地震による災害時において、国際海上輸送機能を一定確保し経済活動への影響を抑えるため、耐震強化岸壁として整備しています。



	C-12	C-11	C-10	計
水深	-16m	-15m	-15m	—
延長	650m	350m	350m	1,350m

大阪港は背後圏に2,100万人の大消費地を抱えており、日用雑貨、衣類、食料品、電化製品等の輸入拠点となっています。これらは主にコンテナに詰められ、中国、韓国、東南アジア、豪州、北米などからコンテナ船で運ばれてきます。これらの多くは、週末のセールに最適なスケジュールで輸入、配送されるため、限られた曜日に船舶が集中する傾向が見られ、利用が集中する日には大小8～9隻が入港しており、今後の需要増加に対応する必要がありました。

近畿地方整備局では、引き続きコンテナ船の大型化の進展に対応した水深、広さとなるよう航路、岸壁背後のコンテナヤード等の整備を推進します。そして我が国の産業競争力を強化し、国民の雇用と所得の維持・創出を図るため、国際コンテナ戦略港湾政策の深化と加速に取り組めます。

また、慶応4年(1868年)7月15日に開港した大阪港は今年で開港150年を迎えます。基本コンセプトに

「大阪港開港150年を市民と祝う。」

「先人たちの功績を称え、感謝する。」

「大阪港への愛着を深める機会とする。」

「港間の国際交流等を通じて大阪港港勢伸長の契機とする。」

「港への集客力を高め、臨海地域の活性化に寄与する。」

「大阪港の将来を見据え、魅力・役割を再認識する機会とする。」

を掲げ様々なイベント等が行われますので、今後とも大阪港をご注目ください。



#### ●志布志港みなと見学会の開催

～次代を担う小学生(通山小学校5年生)が“みなと”を体験学習しました～

(九州地方整備局 志布志港湾事務所)

2月1日、志布志港で志布志市立通山小学校の5年生を対象とした、みなと見学会を開催しました。港湾の施設や役割を学習した後、「フェリーさんふらわあ」の乗船見学を行い、その後コンテナ貨物を取り扱う国際物流ターミナル内で港湾施設の見学を行いました。

フェリーの船内では、船室や船倉など普段見ることができない場所を見学し、ブリッジでは船の構造や航行の仕組みの説明を受けました。国際物流ターミナルでは、ガントリークレーンを間近に見学し、コンテナ荷役のダイナミクスを体感しました。

生徒さんからは「志布志港を通じて加工貿易は行われているのか」、「ガントリークレーンの運転には免許がいるのか」、「志布志港に入港する船舶情報は何日前から分かるのか」といった説明者がたじろぐような質問が相次ぎ、予想を上回る地元の港「志布志港」への関心の高さが伺えました。

今回の見学会は、次代を担う小学生の皆さんに、地元「志布志市」の経済を支える志布志港への理解を深める機会となりました。今後も市民の皆様に対して、「みなと」への理解や親しみを心得る活動を行って参ります。



<座学(港湾の役割)の様子>



<フェリーさんふらわあ(ブリッジ)の見学>

